

石、福井県南条地域の白けい石の調査に参加し、その成果はそれぞれの委員会報告として報告されている。また、同委員会において滋賀県信楽町三郷山地域の耐火粘土の調査が“地調大阪”を中心として現在実施されているなど、戦後50年、組織改正による幾度かの改変を経た大阪地域地質センター50年の歩みは、地方行政機関などの関連業務において地域に根ざした地質調査所の戦後史の一面を示すものと言えるであろう。

注1) 幾度かの改組による名称変更のため総称として掲げた。

参 考 資 料

- 地下資源協会(1950):地質。
 通商産業省地下資源開発審議会鉱山部会(1958):未利用鉄資源第4輯。
 大阪通商産業局北生駒採石技術委員会(1970):北生駒地域における風化花崗岩(まさ土)の採石方法の評価指導指針の策定調査報告。
 大阪通商産業局非金属鉱物資源対策委員会(1989):滋賀県長石鉱業の合理的開発に向けて。
 近畿通商産業局非金属鉱物資源対策委員会(1994):福井県白けい石の合理的開発に向けて。

Miyamura Manabu (1996): Osaka Center for Regional Geology in GSJ (Geological Survey of Japan): a memoir.

<受付:1996年5月30日>

信楽焼とタヌキの置物

丹波焼と並んで近畿の焼き物と言えば信楽焼。その陶器作りは鎌倉時代からと言われています。

土は古琵琶湖層群の粘土を用います。これは今からおよそ3-4百万年前、このあたりに広がった川や湖に堆積したのですが、陶土となる蛙目粘土や木節粘土はどこにでもあるわけではありません。

最近の陶芸一般では、ブレンドされた陶土を購入して用いるのが多いのですが、そんなことができなかった昔の陶芸家達の随筆や談話を読むと、「良い陶土がある場所は感で分かるんじゃ」と言っていますから、信楽の昔の陶工達もきっと、第六感で良い陶土のありかは分かったのでしょう。

さて、信楽焼と言えばタヌキの置物(写真)。これはいったい、いつ、だれが作り始めたのでしょうか? 意外なことに作り始めたのは新しく、昭和初期。作者は藤原鏡造(てつぞう)、号狸庵。

鏡造は明治9年生まれ。幼いころ、京都の清水焼の窯元に預けられましたが、10歳の秋の夜、窓の外をフッとみると、庭で大小のタヌキが輪になって、楽しそうにポンポポンと腹鼓。以来、タヌキのとりこになり、動物園のタヌキや、家で飼っていた小タヌキの百態をスケッチしたそうです。

昭和10年、信楽に居を移した鏡造は、タヌキ百態の置物を作り始めました。この置物を食堂などの店先におくと、口コミで評判となって客が客を呼

び、「福を招く」「客を招く」縁起物となって、昭和30年代には全国的ブームになりました。

鏡造は昭和41年89歳の長寿をまっとうして、この世を去りましたが、自分の作ったタヌキの置物が全国津々浦々に広がったのをその目でみることができ、さぞ満足だったでしょう。(Y.F.)

